

2022年

1月のカレンダー

学びの広場

みんなのちからで35年
(今年の9月で35年目を迎えました)

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	8
				スタッフ ミーティング 10~1時	金曜日 10~13時 アート	青年の会 10~13時
9	10	11	12	13	14	15
				スタッフ ミーティング		織りもの 10~12時
16	17	18	19	20	21	22
				スタッフ ミーティング	金曜日 10~13時 織りもの	青年の会 10~13時
23	24	25	26	27	28	29
				スタッフ ミーティング		
30	31					

1月の活動についてのお知らせ

感染者数はだいぶ収まってきましたが、新たな変異株のこともあり、まだ安心はできません。少しずつですが、活動を増やしたいと思っています。



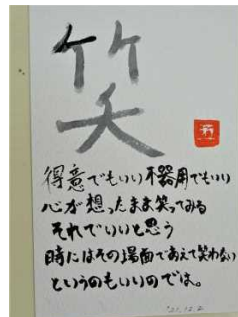
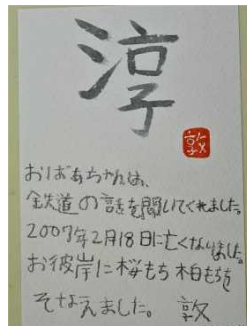
冬のリース
～白の世界～



今月のグループ活動は次の通りです。

- ・金曜日
1/7、21 の2回、10~13時で参加して頂きます。
- ・青年の会
1/8、22の2回、10~13時で参加して頂きます。

～親しい漢字～ (漢字を使ったハガキ作品)



★学びの広場に入室する時には、マスクの着用、手指の消毒をお願いします。また、ご家庭での検温など健康管理にご協力ください。

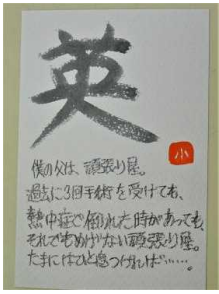
学びの広場

TEL&FAX 042-322-7160

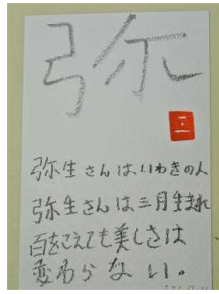
H P <http://manabinohiroba.com/>

E-mail hiroba@pop17.odn.ne.jp





～親しい漢字～
(続き)



Gさんの作品



貫井神社で



TVと本と言葉の話



TVでよく見るのはシニアが好む歴史もので、「ダーウィンが来た」、「世界遺産」など科学・地理の分野も好きです。新しい学説もずいぶん反映されていて勉強になります。「ポツンと一軒家」や、「…路線バスの旅」を視ていて、昭和の頃の「遠くへ行きたい」の番組を思い出しました。

ちょうど宮本常一さんの本を読んでいて、それらの番組も柳田国男らの民俗学の影響もあるのではと思いました。宮本さんは地球何周分も日本全国を歩いて古老の話を聞き取った人です。今話題の渋沢栄一のお孫さん渋沢敬三も民俗学に理解があり、宮本さんはじめ多くの民俗学者・歴史学者の支援をしていたそうです。

ところで、古代史の本に出てくる「まつろはぬども」という言葉が気になっていました。時の政権に服従せず、指示した役務をしないで税も納めない、というほどの意味です。「まつろふ」は今は{服^{まつろ}ふ、順^{まつろ}ふ}の漢字が使われるように服従する という意味とされています。

弥生・古墳の時代から国といっても全国を統一しているわけではなく、政権が及ぶのはまだ今の日本のごく一部でしたから、当時の政権も既に大陸で興^{おこ}っていた先行の国々から先進の文物を得るためにも何とか国を纏^{まと}めようと思ったのでしょう。

ある時「まつり縫^ぬい」という裁縫の言葉を思い出し、辞書を引いてみると「纏^{まつ}り縫い」とありました。この字は身^まに纏^とうのように、身につける、重ねる、合わせるの意味です。確かに布を合わせて縫うことですね。他にも「まち」は布を余分に合わせること、「待ち針」は縫い終わるまで布を合わせたり目印にしておくことです。「まち、まつり」はあわせる、一緒にすることです。また、狩人^{かりうど}の言葉で「待ち木」というのがあります。鹿や猪の通る獣道^{おみち}で木の上に登って待ち伏せることだそうです。「待つ」も一緒にすることです。それから、「祭り」の語も「神仏を祀^{まつ}る」というより、集落の人々が寄合^よい、話合^わいや楽しい行事をすることが先だったと思われます。

そして最後に「政^{まつりごと}」という言葉です。国を治める政治のことで、今の辞書には{古くは祭祀に関係…}とありますが、これは邪馬台国の卑弥呼が呪術を使ったり、その後の政権が飢饉や疫病の終焉^{しゆうえん}を神仏に祈^{いの}ったりしたイメージに引きずられたものでしょう。でも国を治めるには、年貢を計算して配分し、都^{みやこ}の造営や戦^{いくさ}にあたっての役務^{えきむ}の割当てなどいわゆる官僚の仕事が山ほどあります。それらの仕事で国を纏^{まと}めていくことを「政^{まつりごと}」としたと思います。

国々を隅々までまつろわせる(まとめる)には、それぞれの事情や希望をよく聞いて話し合^あってまとめていくことが必要です。今の総理は「聞き上手」だそうですから、本当にそのようにして頂きたいものです。「祀^{まつ}る」という言葉も神仏や祖先としっかり向き合うことから始まったのだと思いますから。

(清水)